

名古屋大学関係史料委員会のことなど

元専任編集室員 田中英夫

「名古屋大学史編集委員会」については『通史』二に、篠田編集長の「編集後記」、および九二九～九三一、九三六～九三七頁で史的経過が述べられている。その九二九頁に、昭和五十年四月の学部長会の席上、「名古屋大学歴史編さん準備委員会」（以下、「編さん準備委員会」）の設置に当たって、横越英一附属図書館長（当時）が、二年ほど前から附属図書館商議委員会のなかに「名古屋大学関係史料委員会」（以下、「史料委員会」）を設け史料収集を行っている、と発言した旨の記述がある。しかしこのいわば当編集委員会の前史に当たる図書館内の委員会については割愛されているので、若干補っておきたい。

昭和四十八年十二月十一日の商議委員会において横越館長は、議題の四番目に館長提案の形で「大学関係資料委員会（仮称）の設立について」を上げた。同案承認後、各学部および教養部から一名ずつ委員を選出することとなった。翌四十九年二月二十六日の商議委員会では同委員会に関する「了解事項」も承認された。その骨子は、「名古屋大学関係の史（資料）の収集・保存を基本的目的とし、収集領域に関しては、名古屋大学を全体と部局、包摂校に分け、各々、制度史、財政史、教育課程史、研究体制史、学生生活史、図書館史、公開事業史の範疇に係わる史料（公文書、私文書、写真・図版類、器具類、談話テープ、刊行物等）を発足時に逆上って悉皆主義で収集する」、であった。まさに文書館構想そのものである。

同日商議委員会終了後、第一回の「史料委員会（仮称）」が開催され、同年四月九日、第二回の委員会において仮

称の委員会名が正式名として承認された。しかし同時に横越館長は、附属図書館商議員会内部の委員会では委員の継続性や財政上の制約等の難点があることから、全学的機関に変更すべき必要性をも指摘している。以後冒頭に挙げた学部長会までの一年間は公には記録もなく経緯は不明であるが、横越館長から学長等関係者に対しこの主旨で何らかの働きかけがあったと推測される。

「編さん準備委員会」は五十年十一月から五十一年九月まで、それを継ぐ「名古屋大学歴史編さん委員会」（以下、「編さん委員会」）は五十二年三月から五十五年四月まで、ともに横越館長を委員長として学長の許で機能したが、諸般の事情で休止の止むなきに至ったことは『通史』の記述通りである。この委員会名の変遷が示すように当初目指した文書館的機能が直接大学史編纂を目指す機能へと収斂したのであるが、学内の機運が今一步盛り上がりなかつたことが、委員会休止の主因であろうか。

『通史』刊行を果たした「名古屋大学史編集室」は平成八年度から資料の収集・保存・活用を目的とした「名古屋大学史資料室」として再出発することとなった。その将来像は、あくまでも私見に止まるが、いずれにせよ文書館的機能を主要な柱の一つとした機構となろう。この意味では「史料委員会」の初心に回帰したとも言えなくもない。「史料」、「編さん準備」、「編さん」の各委員会時代、昭和四十八年から五十五年にかけて附属図書館閲覧課参考掛が直接の事務を担当した。当時参考掛長であった私は、「史料委員会」の最初から関わり、六十年以後も執筆委員、編集室員として『名古屋大学史 通史・部局史』の刊行にいたる全工程に、極小の一歯車ながら、参画できたという希有の幸運に恵まれた。ここで元図書館員として今一つ、挿話を記しておきたい。

川原和子経済学部図書掛長（当時、後、図書館専門員）は貴重書図書館研究を目的とした英米留学の際、歴訪した主要大学が全て大学図書館を完備させていることに驚嘆し、帰学後、横越館長に貴重書に関する進言に止まらず、

文書館を設置すべきことを具申した。植民地時代すでに本国の伝統を輸入して大学文書館を設置した開発途上国に比しても日本は、と慨嘆した氏にも曙光は兆しつつあると報告したい。次に二十年程前の本学図書館報『館燈』記事を挙げておく。

「University archives は大学の歴史に関する史資料一切を収集保管・・・収集物は多岐にわたり大学史に関する公刊本、行政関係の印刷物、各種委員会記録、手書原稿、学長はじめ行政管理にたずさわる学内外要人の書簡、日記、メモ類、伝記、大学の物的財産中記念すべきもの―創立当初の家具とか草創期の人物にゆかりのある品・・・等々―archives といっても博物館をかねた存在といつてよい」（川原和子「貴重書図書館めぐり―アメリカとイギリス―（1）」『館燈』四二号、一九七七年 三五四頁）

『名古屋大学五十年史』のネタ本

専任編集室員 高 木 雅 史

私が名古屋大学史編集室に勤務するようになったのは一九九二年四月からであった。稿本（通史第一次原稿）の編集が本格化した頃である。稿本の編集から通史刊行までの作業を進めていく上で、随分とお世話になったネタ本がある。各部署の沿革史・誌類がそうであることは言うまでもない。ここで特に記しておきたいのは、洪沢元治『五十年間の回顧』（一九五三年刊）と須川義弘『半生を顧みる』（一九八二年刊）である。

『五十年間の回顧』には、一九三九年に初代総長になられ一九四六年に退任されるまでの名古屋帝国大学時代の